

月刊 地域支え合い情報

[2018年5月20日発行]

本体 286円+税

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



就労継続支援を行う多夢多夢舎中山工房のカフェは地域住民にとっても憩いの場に(詳しくは11頁へ)

特集

新しい風を 吹き込む人びと

- スローガンは
「みんなでつくろうみんなのまち」³
ふれあいの四季 (宮城県山元町)
- 居場所づくりからまちづくりへ⁵
一般社団法人さとうみファーム (宮城県南三陸町)
- 「お茶を飲みながら、
お坊さんとお話ししませんか？」⁷
坊主喫茶 (宮城県女川町)

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント
(兵庫大学 生涯福祉学部 准教授 小林 茂さん)

まじわる災害公営住宅⁹
大町きらきらサロン (福島県南相馬市)

東北の元気¹⁰
IOC 岩切おもしろクラブ (宮城県仙台市宮城野区)
特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房 (宮城県仙台市青葉区)
仙台紙飛行機を飛ばす会 (宮城県仙台市泉区)

暮らしを支える支員¹³
山田町社会福祉協議会 (岩手県山田町)

どこでもサロン¹⁴
朝日3丁目元気の巣 (北海道弟子屈町)

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ¹⁵

暮らしを支える支援員¹⁶
名取市すまいとくらしの再建支援センター (宮城県名取市)

・ 読者の声 ・ 購読者を募集しています! ・ 次号予告 ・ お知らせ

新しい風を 吹き込む人びと

地域づくりには「土の人」と「風の人」とが
両方必要だと言われます。

その土地で生まれ育った人と
よそから移り住んだ人あるいは外からかかわる人のことです。

それぞれの性質があり、役割があります。

地縁、言語、風習、伝統文化など、
その土地に生まれ育った人たちが培ってきたものがあります。

一方で、外から入ってきた人たちが
変革のエネルギー、これまでにない視点、
新たな産業と雇用などをもたらしています。
まさに、地域に「新しい風」を吹き込んでいるのです。

今回の特集では、
「新しい風を吹き込む人びと」が
地域に何を運んだのか
それをどのように土の人と一緒に育てて
いかにして地域に根づかせていったのかを
3つの取り組みからご紹介します。



ふれあいステーションの前で。外出支援の利用者と代表の渡部孝雄さん

DATA

ふれあいステーション

〒989-2112
宮城県亘理郡山元町真庭字名生東 75-7
TEL:080-3332-6321

スローガンは 「みんなで作ろうみんなのまち」

◎ふれあいの四季（宮城県山元町）

ポイント ●住民の声に耳を傾けながら活動の方向性を決めることが大事だ
●居場所づくりと外出支援、生活のちょっとした困りごとの解消をそれぞれ組み合わせることで、利用者の要望に柔軟に対応できる

「**居場所づくりと生活支援を柱に**」

ふれあいステーションは、宮城県山元町で任意団体「ふれあいの四季」が手がける、地域の居場所だ。月曜日から土曜日の午前10時から午後6時まで開いていて（冬季は午後5時まで）、地域住民がお茶を飲みながら会話を楽しんでいる。「いろいろな話ができる。良い」「散歩に出たときに、

畔道あぜみちの先に、まるでとんと虫のような、丸みのあるフォルムがかわいらしく、屋根の赤色が鮮やかな建てものが2棟並んでいる。入口にはこんな張り紙がある。「地域に住む多世代の人々誰もが利用できることにより自分らしく過ごせる居場所。『地域の茶の間ふれあいステーション』」。室内には、テーブルやイス、戸棚が整列されていて、まさにお茶の間といった光景が広がる。

いつも立ち寄っている」と利用者は話し、交流拠点のひとつになっている。また、ふれあいの四季は、主要な活動として、有償（非営利活動）・無償の生活支援を、会員相互の共助の仕組みで、時間単価1時間千円、30分500円、15分250円の15分刻みで行う。任意の団体のため、形に捉われないことなど、個々に暮らす人びとの制度の狭間の不自由さに対応できている。特に、足腰が不自由な高齢者から、通院や買いもの、サークルなどへの社会参加の機会に、外出支援が重宝されている。「病気で家族が通院しているから、すぐく助かっていきます」「とても安くて、ちょっと遠慮してしまうくらい」とよろこばれている。外出支援のついでに、電球交換やゴミ出しなどのちょっとした生活の困りごとにも無償で対応している、好評を得ている。ふれあいの四季は、「みんなで作ろうみんなのまち」をスローガンに掲

ふれあいの四季

代表 渡部孝雄さん

「私は山元町を愛していますから。なんとかこのまちを良くしたいという思いで活動しています」



げる。代表の渡部孝雄^{わたなべ}さんは、「第二の故郷である山元町を良くしたい」と熱く語る。出身は福島県相馬市だが、移住して37年になる。「地域に新しい風を吹き込みたいと思っ

て、2011年3月1日にふれあいの四季を設立。まず、地域の居場所づくりに着手したが、そのわずか10日後に東日本大震災に見舞われる。坂元駅前の子定地は津波で流出し、「一度は諦めた」（渡部さん）。そんなとき、さわやか福祉財団のコーディネーターの渡邊典子さんたちから「一緒に避難所を回りませんか」という提案がもちかけられた。巡回して支援物資を配布し、移動サロンを開催するうち、渡部さんのなかで、「自分にもできることがあるかもしれない」と手応えを感じられるようになったという。「助かる」と言っ



ふれあいステーションのなかの様子。2棟はなかでつながっている

れる人がいて、活動できている。支える側も支えられるというんですね」。そのように、避難所から本格的に始まったふれあいの四季の活動。やがて移動手段をもたない住民から不便さを訴える声が発せられる。同年7月、そうした住民の要望に応じて、ふれあいの四季は外出支援に乗り出した。ドライバーは自家用車をもつ65歳以下の住民に声をかけて募った。6人の有償（非営利活動）ボランティアが、シェアリング・エコノミーを先取りした運行を支えている。82人の会員のうち一日平均6〜7人が、岩沼市など主に町外へ出かける目

的で利用している。「地道な活動だが、公共交通の欠けているところをカバーできているのでは」と渡部さんは自負する。

14年には、念願の常設の居場所「ふれあいステーション」を開設。ふれあいステーションの利用希望者を車で迎えに行ったり、ここに顔を出した人が外出支援を知って申し込んだりと、相乗効果を生んでいる。

地域包括ケアのあるまちを目指して

渡部さんはほかに、ネットワークづくりのために、11年10月に、仮設住宅の住民らとまちづくり団体「山元町を愛する会」を発足させている（ふれあいの四季の活動母体）。派生して、13年6月には、医療関係者、福祉関係者らと「山元未来ネットワーク」を結成。勉強会の開催や町長への提言書提出を行ってきた。

医療、介護、介護予防、住まい、生活支援サービ

スが一体となって提供され、高齢になっても自分らしく暮らし続けられるような「地域包括ケアシステム」のあるまちを目指して、こうした活動を展開している。ふれあいの四季は、いわば「生活支援の実働部隊」という位置づけだ。

「一人でも二人でも困っている人がいたら助けたい」と渡部さん。「昔は助け合いが当たり前だった。助け合いがあつて、庶民の暮らしが成り立っていた。そうした環境で育ってきたから」と、決して特別なことをしているわけではないと語る。ただ、「寄り添いすぎると、相手が警戒して離れてしまうのが難しい。いくら善意でも、立ち入る限度はわかまえないといけない」とも付け加える。

みんなのまちは、みんなで作る。まちへの愛と地域支え合いへの信頼を真んかに据えた活動は、これからも理解者・協力者の輪を広げていくだろう。田



海が見える牧場は、町内外の人が集い、つながる場

DATA

一般社団法人
さとうみファーム

〒988-0452
宮城県南三陸町歌津町向 22
TEL 0226-29-6379
HP <http://satoumifarm.org>

居場所づくりからまちづくりへ

◎一般社団法人さとうみファーム（宮城県南三陸町）

ポイント

- 震災後の支援活動が、地域に根づく持続的な産業に
- 他団体とも連携して、地域で必要とされる役割を果たす

新たな産業と集い場づくり

宮城県南三陸町の海で採れるわかめは、ミネラル豊富で美味しいと評判だ。しかし、食用に加工されるのは主に葉状の部分で、茎状の部分は取り除かれることがほとんど。それらを捨てずに、飼料として与えられて育った同町の羊が、「南三陸わかめ羊」として、ブランド肉に仲間入りをしている。

同町歌津地域、海から200メートルほどの場所にある、羊の牧場、「さとうみファーム」では、現在82頭の羊が飼育されている。地元産の高品質なわかめを食べていることで、通常の羊肉より塩味が少なく、羊肉特有のくせが少ないのが特徴。東京の高級料理店にも出荷されているという。

加工された肉は、個人でもインターネットやファーム内の直売所で購入することができる。また、ファーム内で野菜とセットでバーベキューをして味わうこともできる

（要事前予約）

同ファームは、もともと住民の居場所づくりの取り組みの一環として設けられたもので、出荷用の羊を育てているだけではない。来場者が羊とふれあったり、羊毛で小物づくりをしたり、遊具で遊んだり、目の前の海でシーカヤックを体験することもできる。

わかめの未利用部分を活用するという、これまでなかったアイデアで牧場運営をしているのは、「一般社団法人さとうみファーム」。代表理事の金藤克也かねとうさんは、2017年2月に同町へ移り住んだ、他県の出身者で、東日本震災直後から物資支援や居場所づくりなどに取り組み、同町を第2の故郷にする決めた。このまちに骨をうずめる覚悟だ。

物資支援から雇用創出へ

11年3月、東日本震災発生当時、金藤さんは広島県に自宅をもちながら、神奈川県で会社を経

一般社団法人さとうみファーム

代表理事 金藤 克也 さん

「『復興支援』と重く考えず、気軽なものとして、楽しくコツコツ取り組んでいます」



営していた。国内外の人たちが被災地域へさまざまな援助をしている様子を見聞きし、「自分も何かできないか」と、もともとと過ごしていた。そして、震災から半月後にインターネットなどでメンバーを募り、さらに半月後、神奈川県から支援物資とともに車に分乗して東北を訪れた。それから、継続して南三陸町などにかかわるようになっていった。

ネットなどで15人ほどを集め、任意団体「さとうみプロジェクト」を設立。海に面した集落で、住民の声をもとに、同年9月に祭りのような催しを開いたり、12月にクリスマス会を開いた。物資を渡したり、食事をしてもらったり、明るく楽しい時間を過ごしてもらった。

その後、集落内の土地を借り、カヤック体験会を開いたり、遊具を設置したりして、人が集える場をつくっていった。活動の維持・継続のためには収益事業も必要だった

ため、団体を法人化して、羊の飼育・出荷を検討。特定の植物を飼料とする、海外のブランド羊を参考にし、試行錯誤するなか、地元のかめを活用する飼育方法を思いついた。

メンバーは皆、羊の育て方も飼料のつくり方も知らない素人だったが、地元の住民や県内の大学の研究者たちにも相談しながらブランドづくりの方法を模索してきた。14年から羊を飼い始め、17年度には十数頭が出荷された。目標として、18年度は30頭、ゆくゆくは100頭ほどまで出荷数を増やす。その頃には、スタッフの人員費も十分にまかなえる見込みだ。



羊毛を使ってフェルトのワークショップや小物づくりも

現在、ファームで働くスタッフは6人で、そのうちの4人がもとの地域住民。また、飼料づくりの工場を稼働する「さとうみファイン株式会社」も立ちあげ、2人を雇用している。

地域の一員として

活動を始めた当初は、周辺集落で知り合いは少なかった。しかし、海辺に小屋を建てたり、作業をしていると、漁師などと話す機会ができ、少しずつ地域とのかかわりが増えて、地域住民との距離が縮まっていった。

自分たちの活動の意図が上手く伝わらなかったりして、近隣集落の住民と行き違いになり、怒られてしまうこともあったが、そのたびにまずは謝る。そのうえで、きちんと説明し、理解してもらえるように努めた。「むしろ、一度怒られたほうが仲良くなれるというところもあると思います」と金藤さん。一人ずつ向き合い、関係を築いてき

ている。

また、気仙沼市や女川町などの団体とも協力している。たとえば、気仙沼市の子ども支援の団体との連携では、小学生が羊毛加工のための作業を



自慢の海でカヤック体験

学び、体験する機会を設けたりしている。

ファームは、住民の日常的な居場所であり、県内外の人たちの観光スポットでもある。遠方から同町へ、多くの人に足を運んでもらうことは、町内の商店を利用しても良かったり、地域のことをよりよく知ってもらうことにつながる。そうして、さまざまな角度で、まちのさらなる活性化をあと押ししたいという期待が込められている。



法話のなかで、お経をひもとして解説。住民から質問もあがって、相互にやりとりが行われる。お坊さんたちは、20歳から30歳代中心と歳が若く、身構えずに気軽に話せる相手だ

「お茶を飲みながら、お坊さんとお話ししませんか？」

◎坊主喫茶（宮城県女川町）

ポイント

- お坊さんはある意味で「傾聴のプロ」。しっかり話を聞いてくれる相手があると住民は気持ちが和らぐ
- 法話は心のよりどころ。お坊さんはいらただけで安心感を与えてくれる存在でもある

お坊さんが仏の道を説く。「悩みを解決するのが私たちの仕事ですが、最終的な目的は何なのか。『悟ることでしょう』と言われますが、実はもう一段階あります」。

宮城県女川町に建つ災害公営住宅「運動公園住宅」の集会所には、常設の喫茶スペース「ふれあいカフェ」がある。そこを借りて、月一回「坊主喫茶」を開催している。町内外にある曹洞宗のお寺の僧侶5人が、住民とお茶飲み話をし、合間に5分程度の短い法話を交替で披露する。冒頭の法話はこう続く。

「震災のような無常があると、人は解決方法を宗教に求めることがあります。（中略）なぜそうなるか追いつめていくと、『悟り』に行きつく。お経の修証義などを見て、こうしなければいけないというのが悟り。ただし、悟りもある種のとらわれといえます。悟りからも自由になるのが解脱。解脱すると、『こういう悲しみや悩みがある。それこそが命なんだ』という心境になる。そうすると、心も楽になる。時折説話や体験談も交え、わかりやすく解説していく。

話を聞いた住民は、「ためになる。私たちが知らないことばかり」「お坊さんがいてくれるだけで、気持ちが安らぐ」と、知恵や安心感を受け取っている。参加者には檀家が多いが、宗派や信仰の有無にかかわらず、誰もが自由に足を運べる。

心に寄り添うために

2014年の同住宅の入居開始後から、女川町社会福祉協議会の要請を受けて活動を始めたのが、女川町の保福寺の八巻英成さんだ。「生活の愚痴が出るなどネガティブな空気になりがちだったので、いい状況に変えられるように、気軽に話せる法話の集まりを企画しました」と坊主喫茶の目的を語る。

当初は、お茶飲みの中かで、「余震が気になって眠れない」「亡くなった知人が夢枕に立つ」といった精神的な悩みが多く寄せられ、お坊さんが受け止めていた。最近では、時間が経って気持ちが落ち着き、傾聴や法話の効果もあってか、明るい話題が増えた。女川町の溪秀院の石山宗彦さんは、「私たちはきつ

かけづくり。こうした場を通じて、住民さん同士の距離が縮まってくれたら」と期待する。実際、「ここでいろいろな話ができて、『あの人も同じことを考えていたんだ』とわかり合える」という声があがっている。

お坊さんたちも多くのものを得ているという。「私たちの常識と世間の常識とのすり合わせができてい」と石巻市の吉祥寺の奥田典登さん。「法話に対する住民さんの反応が参考になる」と話す八巻さんは、日頃から外で声をかけられる機会も増えた。「こうした活動をしていなければ、生まれていなかった交流」とよるこび、「お寺に人が来ないという話も耳にするが、こちらから人の集まる場所へ出て行けばいいのでは」と語る。

他地域出身者ができること

坊主喫茶に携わる5人中3人は、他市町村の僧侶だ。八巻さんも、出身は町外だ。しかし、他地域出身であることが、プラスに働いているとい

う。「地縁がないことで、気兼ねなくすぐに行動に移せる。よそから来たことで、関心をもたれやすい」。住民の側も、「この町の人じゃないから、余計にいただけるものがある気がする。別な香り」を運んでくださるよう」と新鮮に感じている。

住民との間に立ってサポートするのが、カフェスタッフの坂本礼子さんたちだ。「合の手を入れてフォローしてくれて、かしこまらず、和やかな雰囲気ですることができるとお坊さんたちは感謝する。「笑い合えるのが一番。ここだけでもつらいことを忘れられるように」と坂本さんは明るく話す。

「お互いに声をかけ合って来る。皆必要としていると感じる」と参加者。「楽しみにしてくださっているのに応えたい。身の丈にあった活動を長く続けていきたい」と八巻さんたち。これからも、心癒す言葉と心安らげる存在感で、傍らに寄り添う。田

専門家に聞く地域づくりのヒント

向かい合うことから生まれる “暮らしを続ける「力」”



兵庫大学 生涯福祉学部 社会福祉学科 准教授

小林 茂 (こばやし しげる) さん

1959年神戸市生まれ。1984年より兵庫県社会福祉協議会。地域福祉部、ボランティアセンター、施設福祉部、研修所、総務企画部等に従事。1995年阪神・淡路大震災直後はボランティアセンター、芦屋市現地事務所に従事。2011年東日本大震災時では約1か月、宮城県内で支援活動。2016年より現職。専門は地域福祉。

大災害を経験して被災地で暮らすことは、決して楽なことではありません。私も阪神・淡路大震災の被災者として少しは想像ができますが、東日本大震災の被災者は、震災時に大きな傷（身体も心も）を受けました。その後の厳しい暮らしが幾重にも重なり、とても「語りつくせない」「語れない」悩み、苦しみを被災者の方はお持ちのことと思います。その苦しさは一人ひとり違うものです。それは事例からも垣間見えます。このたびの事例は、その苦しさを“新しい風”と一緒に明日の暮らしにつなげる地域づくりの事例です。

“つながり合う”ことで暮らす力を持つ

3つの事例で共通しているのは住民の「居場所」をたいせつにしていることです。居場所をきっかけに人びとがつながりを深めています。住民による「居場所づくり」や「支え合い活動」には6つの力があるといわれています。それは、①自分をたいせつに思える力（自己肯定感）②役割をつくる力（社会的役割）③孤独感を薄める力（安心感）④情報を交わす力⑤意欲を高める力、そして⑥助け合う力です。

「坊主喫茶」では、集まる人びとを受け止め、安心感を持てる環境をつくっています。安心を持てる環境から上記の①から⑤の力が生まれているのがよくわかる事例です。この事例のポイントは「傾聴のプロ」のお坊さんと、誰もが参加できる「開かれた」場所がそれぞれの力を引き出していることです。

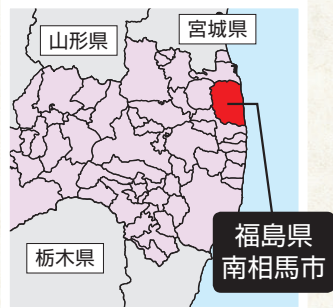
“つながり”から生まれた「生きる力」を形にする

「ふれあいの四季」では、住民の「つながり」から生まれた「助け合う力」を事業（生活支援）にまで発展させています。だからこそ、一人の困りごとを見逃さない、山元町で暮らし続けるための知恵と工夫がいっぱい入っています。「ふれあいの四季」はまさに山元町で生きる力を形にした取り組みといえます。

“つながり”から暮らしの“糧”をつくる

人は生きていく糧が必要です。「さとうみファーム」の取り組みは、「居場所」から被災地で暮らし続けるための糧をつくる取り組みです。被災地の暮らしの糧を、被災地の人びとと土のつながり・信頼と地元資源をたいせつに生かしながらつくり出しています。そして「“つながり”から“糧”づくり」の輪は、被災地外にも広がりを見せています。

3つの事例とも、地元外から移住した人びとや通う人びとのパワーが活かされています。いずれも、地元の人と一緒に、その暮らしに一つひとつ向き合うことをたいせつにしています。地元の人びともその思いを受け止め、互いに知恵を出し合いながら、新しい「力」を生み出しています。お互いが真剣に向かい合う、そのことが明日への暮らしの「力」を生み出していく。それを教えてくれた3つの事例でした。



笑顔きらめく場所をつくる

大町きらきらサロン
(福島県南相馬市)

まじわる！
集団移転＆
災害公営住宅
第32回



この日手づくりした鯉のぼりの飾りを手に、
笑顔を見せる参加者たち

福島県南相馬市原町区にある、大町東団地、大町西団地、大町南団地の3つの災害公営住宅には、全149戸に149世帯が暮らす。

大町東団地の集会所では、週3回「大町きらきらサロン」が開かれている。3つの住宅の住民と周辺地域の住民と併せて20人ほどが常時参加していて、大きな行事の時には80人以上が集まることもある。

主に、お茶飲みや軽運動、体操、手芸などを行って

いる。季節ごとに花見や流しそうめん、紅葉狩り、クリスマス会のような行事も催している。

4月末の開催日には、季節の小ものづくりとお茶飲み、合唱を行った。

まず、竹串や木板、色紙、ビーズ、ひもを使って、鯉のぼりの飾りづくりに取り組んだ。つくり終えた参加者は「孫にプレゼントしようと思います」と満足げにっこり。サロンの参加者は女性が大半だが、この日は男性住民に材料を提供してもらい、一緒に作業をした。これを機に男性の参加が増えていくことも期待される。

続いて、お茶とお菓子が振舞われ、食卓を囲んで話に花を咲かせた。そのあとは、「お座敷小唄」の替え歌「ボケない小唄」や童謡の「かたつむり」「汽車」を声高らかに歌った。リズムに合わせて手指を動かす。テンポを速めながら何度も同じ曲を繰り返すうちに、白熱して笑いの渦が巻きおこる。歌い終え、「いやいや笑った、笑った」「笑うのが一番」と参加者。帰りに際には、「いつも楽しい。



こうして皆と一緒に笑いも交えて歌うことは、
健康維持にも効果的だ

ここが大好きです」「ここで友だちになれて、お話できるのがストレス解消になる」と口々にサロンの良さを語った。

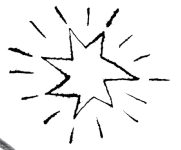
こうした会場準備などの運営は、住民ボランティアが担う。大町東団地の住民で代表の鎌田たつ子さんを中心に、2016年1月からサロンを開催している。

目的は、住民の居場所づくりと健康づくりだ。「災害公営住宅に移って外出の機会が減り、歩けなくなった高齢者がいた。きっかけづくりが大事だと感じている」(鎌田さん)。鎌田さんは震災前には他県にいたが、南相馬市の仮設住宅でひとり暮らしをする母親が心配で、同居を始めた。仮設住宅でサロン運営に携わった経験を活かして、災害公営

住宅でサロンを開いている。活動内容は、月1回のスタッフ会議で話し合ってから決める。踊りが上手な人がいれば、「皆で踊ろう」となる。「ユーチューブでおもしろい遊びを見つけた」と催しの企画を持ちこむ人もいる。「皆さんのよろこんでくださる笑顔が素敵で、『クセになる』んです」と鎌田さんたちはやりがい語る。

開催には、多くの人の協力を得ている。会議には、各団地の自治会長も参加し、情報を共有する。仮設住宅の頃からつながりのある、全国各地の支援団体や学生ボランティアも、定期的にイベントを開く。鎌田さんによれば、ひとり暮らしの人も多く、若い世代とふれあうと、かつて三代で暮らしていた頃がなつかしく思い出されるといふ。また、若い人たちのエネルギーにふれて、皆生きいきするそうだ。

大町きらきらサロンは、住民が朗らかに笑い合える場所であり、世代を超えて交流が生まれる場所だ。こうした場をきっかけに、日常に輝きが増していく。



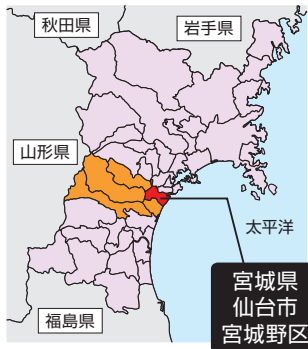
東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

DATA

IOC 岩切おもしろクラブ

連絡先：仙台市岩切市民センター
〒983-0821
宮城県仙台市宮城野区岩切字三所南88-2
TEL 022-255-7728



食事を囲んで交流促進

魅力あふれる人やものを再発見

楽しく地域を学び直す

今回は...

学び直して地域づくり

◎ IOC 岩切おもしろクラブ (宮城県仙台市宮城野区)

他地域からの転入で人口が増加しているという、宮城県仙台市の岩切地区では、新旧住民が早く馴染めるよう、住民団体の「IOC(岩切おもしろクラブ)」が交流の機会を設けている。同クラブは、楽しみながら地域を学び、世代間交流を図るということをコンセプトに活動。転入者が多くても、地域住民の連帯意識を低下させず、地域を活性化させることが目的だ。

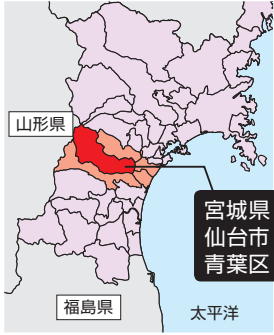
同クラブは、2015年に活動を開始し、現在、10人の会員が中心となって、催しの企画・運営を行っている。内容は毎回異なり、餅つきや音楽鑑賞会をしたり、ぶらつとまち歩きをしながら、神社や寺を見て回って地域のことを学び直したり、農家の庭先で芋煮を食べたりと、さまざま。張り紙や回覧板などで広報していて、誰でも参加することができる。

40〜50年暮らしていても、わざわざ地元について学んだことはないという人も多い。「改めて自分たちのまちのことを知ることができて、うれしい」などと、地域に対する愛着も深まっている。催しは、地域住民がもっている特技や知識などを活用す

る場でもあり、地区内の達人や団体がゆるやかに連携している。これまで5回の催しを開き、参加者は延べ200人以上。一緒に楽しいことをすれば、初対面でも話することができるし、別の日に出かけた先などで会えば、「こないだは、どうも」と挨拶を交わせる。

「この地域で育った子が、いずればかのまちで暮らしても、ふるさとの岩切で子育てしたいと思ってもらえたら最高ですね」と語るのは、会長の渡辺敏之さん。東日本大震災の発生時には、地区内でも住宅が全壊したり、道路が陥没するなどの被害があり、地元町内会で3日間の炊き出しを行った。食材を提供し合ったり、庭の井戸を貸してくれたら、大人ばかりでなく、中学生が水汲みなどをしてくれたり、住民同士で手を取り合うことの力強さを実感できたという。

「まずは日頃から互いの顔を覚えていないと、いざというときに気にかけてようがない。どういふ人が地域にいるかをわかっておくことが大事。顔を覚えることがいろんなことの根っこ」。地域の魅力、おもしろさを再確認しながら、支え合える地区づくりに励んでいく。清



アート活動に動しもメンバー



個性を感じられる雑貨はネットからも購入可能

地域住民が憩い、メンバーとふれあえるカフェ

DATA

特定非営利活動法人
多夢多夢舎中山工房

〒981-0952
宮城県仙台市青葉区中山 2-18-5
TEL 022-277-0081
HP <https://tamtamdot.stores.jp/>

たむたむ亭の営業時間は、
火～土曜日の11:30～16:00

今回は...

個性を伸ばし、つながりを増やす

◎特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房
(宮城県仙台市青葉区)

仙台市青葉区にある、中山地区の静かな住宅街。障がい者の就業支援を行う事業所に併設されたカフェ、「Cafe & Shop たむたむ亭」には、今日も地域内外の人がやって来る。両施設を運営するのは、「特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房」だ。

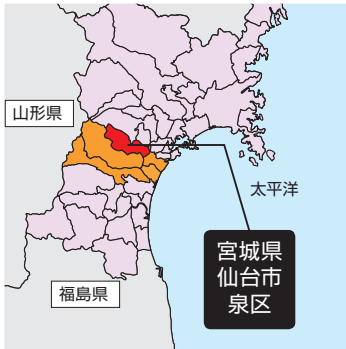
コーヒーや日替わりランチ(500円)などを味わえる、温かみのある店内では、就業支援事業所を利用するメンバーが給仕を手伝うこともある。お客も笑顔で交流し、「10年以上前から、ここに通っている人たちと顔を合わせて。外で見かけると、手を振って挨拶してくれる」と話す。飲みものなどのほかには、カラフルな手ぬぐいや、絵が描かれたポーチなどの雑貨が販売されている。県外の雑貨屋にも卸しているもので、印刷される模様をデザインしたり、小物をつくっているのも、就業支援に通うメンバーたちだ。

メンバーが生きいきと社会に飛び出していくことを目標として、その人が特技や個性を伸ばせるものは何だろうかと模索した多夢多夢舎。メンバーが個性を表現できるよう、アート活動を力を入れてきた。絵画を中心

に、流行や型にとらわれない、作者の内側から溢れ出る感情や衝動に基づいた創作の機会を用意している。メンバーは、自分のペースで、思いのままにキャンパスを彩っていく。市内や東京で絵画展を開くこともあるし、作品に値段をつけて購入してもらうこともある。もちろん、たむたむ亭にも飾られている。

また、メンバー外の人を対象に、イベントなどでメンバーがワークショップを行うこともある。トワルと呼ばれる無地の洋服を自由に着色する活動では、完成した作品を身にまとい、皆がいつもと少し違う自分に。メンバーの若月靖さんは「お客さんとしやべりながら作業できるのが楽しい」と充実した時間を送る。

「遠方のワークショップの場では会えないメンバーもいるので、より多くの人に、たむたむ亭へ足を運び、ふれあってほしい」と話すのは理事の坂部認さん。1・2階のホールでイベントを開催したり、講演、作品展示、移動販売カフェなどにスペースを貸し出す日を設けたりして、地域の人が出入りするきっかけも増やす。自己表現と交流の機会が、メンバーの暮らしを広げていく。



男性が多い集まりは実はとても貴重だ



広々とした公園で、風を読みながら、熟練の技を見せる



一人ひとりのこだわりの愛機を飛ばす。先端には安全のための緩衝材をつけている



飛ばした紙飛行機が見えなくなれば、皆で探しに行く。こうして歩き回るのは健康にもいい

今回は...

風に乗る、自由に空を舞うように

◎仙台紙飛行機を飛ばす会（宮城県仙台市泉区）

宮城県仙台市に、毎日、公園で紙飛行機を飛ばして楽しむ男女の集まりがある。その名も「仙台紙飛行機を飛ばす会」。

同市泉区中央の七北田公園で、午前9時30分から11時30分まで、60歳代男性を中心とした泉区内外の住民が、手づくりの紙飛行機を飛ばす。会員は約35人で、そのうち常時10人ほどが参加している。「全日本紙飛行機選手権大会」などの大会を目標に練習する人もいれば、好みに飛ばす人もいる。自由なペースで活動できるゆるやかな集まりだ。

東北大学卒で日本紙飛行機協会会長の「菅康明さん」とその同級生の2人の手づくりられた会は、住民の自主的な活動に広がり、約20年もの間続いてきた。「飛行機が小さいころからの憧れ」「定年後、暇でどうしようもなくて、ここへ来たらやっていた。自分にもできるかなと思って始めたな」と会費はきつかけを語る。

紙飛行機といえば、正方形の用紙を対称に折つたものを想像する人も多いだろう。しかし、大会で使われる紙飛行機は、「ホワイトウイングス」と呼ばれる、ケント紙を用いたペーパーグライダーが一般的だ。自作の自由機と市販のキットがあり、胴体に主翼と水平尾翼を差し込んで組み立てる。胴体下部の

フックにゴムをかけて、引いた反動で飛ばす。左手にゴムを結んだ棒（カタパルト）、右手に紙飛行機をもち、前方斜め上45度の角度で空に放つ。うまく上昇気流に乗れば、旋回しながら、一分以上宙を舞う。

大会は滞空時間を競う。そのため、飛び方を負ながら、翼などの調整をする。「少しさわっただけでも飛び方は大きく変わる。本当に奥が深いんです」と会員。全日本紙飛行機選手権大会での優勝をふくめた、上位入賞の実力者も何人もいる。

ここで知り合った人たちも多い。少し疲れたら折り畳みイスに腰かけて休憩し、家庭やふたんの生活、病院のことなどを、会員同士気兼ねなく語り合う。会が終わってから食事に行くこともある。初心者にも、上手な会員が教える流れが自然にできあがっている。科学館や市内の小学校、幼稚園、コミュニティセンターで、子どもたちに紙飛行機教室も定期的に開いている。東日本大震災後には、気仙沼市や石巻市などの被災地でボランティアの紙飛行機教室を実施し、笑顔を届けた。紙飛行機を通して、人と人との交流も生まれているのだ。

「風に乗る、高く舞いあがれ。紙飛行機は男のロマン。どこまでも広がる空は第二の人生だ。」

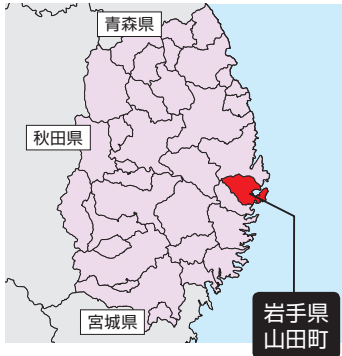


暮らしを支える支援員29

顔の見える交流をたいせつにつなぐ、 地域のよりどころ

山田町社会福祉協議会
(岩手県山田町)

ライター：元持幸子



東日本大震災から7年目を迎える岩手県山田町は、ハード事業整備としての復興工事が進み、新たな市街地の姿が見え始めてきている。山田町社会福祉協議会（以下山田町社協）では、住環境の変化が大きいこの時期に、新たな地域における自治形成や住民交流の支援に力を入れていく。同町社協の生活支援相談員は、29人。応急仮設住宅と災害公営住宅の戸別訪問、自治会形成の準備会や交流会の支援を行っている。事務局次長の黒澤寛さん（41歳）は、「顔の見える関係づくりをたいせつに、地域支援員の活動を展開していきます」と説明する。



山田町ソナタハウス※の一角にある地域福祉活動拠点「ひなたぼっこ」

取り組みの一つとして、地域の福祉拠点「ひなたぼっこ」を2017年5月に開設した。生活支援相談員が常駐し、誰でも利用できるサロンスペースを提供する。日常生活相談やボランティア活動の相談受付、さらにレクリエーション用具や福祉機器などの貸し出しも行っている。隣接する2つの災害公営住宅や応急仮設住宅、既存地区の住民たちから利用されているひなたぼっこ。開所当初は、暮らしの相談ごとが多く寄せられ、個別対応や町関係機関へつなぐ役割を担ってきた。開設から約1年が経過し、気軽に立ち寄れる場所として定着を見せている。「ここに来れば、誰かに会えると思ってきたの」と顔を出して日頃の生活の様子を語っていく災害公営住宅の住民や、散歩の途中に立ち寄る

常連の地域住民もいる。夕方頃は学校帰りの小学生もやってくる。常駐する生活支援相談員の横田佐知子さん（32歳）は、利用者の声を拾い、地域の課題に耳を傾け、ニーズの変化を察知している。最近では、住民同士で課題を解決する機会も出てきたという。たとえば、災害公営住宅に先に入居した人たちが、これから入居する人へ引越しの方法や工夫、自治会の様子などを伝え、引越し作業を手伝う光景が見受けられるようになった。住民同士による課題解決も見受けられるようになったという。サロンの企画については、昨年度好評だったレクリエーションを今年も取り入れる予定だ。幅広い世代の人や男性にも利用してもらいやすいような活動内容を、住民と一緒に考え、工夫をしていく。

今後の地域づくりについて、黒澤さんは「住環境の変化が続くなか、

これからも顔の見える関係づくりをたいせつにしていきたいです」と語る。山田町社協は、人の温かみあるつなぎ役として、暮らしの安心感や住民の力が育まれていくことを期待して活動する。



気兼ねなく話をしていく住民を笑顔で迎える山田町社協職員

DATA

社会福祉法人 山田町社会福祉協議会

〒028-1321

岩手県下閉伊郡山田町山田第15地割82番地2

TEL 0193-82-3841 FAX 0193-82-5670

<http://www.yamada-shakyo.or.jp/>

※ 山田町ソナタハウスとは、NPO 法人こども福祉研究所が運営する子どもたちの自習室（居場所）

どごでもサロン

第10回

自然なつながりと支え合いを生み出す



プレハブ小屋が集いの場

「朝日3丁目元気の巣」 北海道弟子屈町



弟子屈町は北海道東部の内陸に位置。摩周湖などの湖沼と森林が織りなす景観美や豊富な温泉で知られる。人口約7400人、高齢化率は約37%。町内にはさまざまな「集いの場」があるが、なかでもユニークなのが「朝日3丁目元気の巣」だ。

朝日3丁目は、町中心部のJR摩周駅から西に1.5キロほどの住宅地。その一角に、床面積50平米ほどのプレハブ小屋が建つ。小屋は今から20年ほど前、町議会議員だった故・坪井嗣雄さんが、建設会社が食堂に使っていたものを譲り受け自宅裏に移築。選挙事務所とした。土間のコンクリートに点々と刻まれたカラスの足跡は、移築作業をプロに頼まず、坪井さんと地域住民が協力して行った証という。

2回くらいでしたが、仲間が年を取るにつれてだんだん回数が増えていったんです」と説明するのは坪井さんの妻、輝子さん（80歳）。現在は、輝子さんをはじめ、60〜80歳代の女性が多いときで8人ほど、週1、2回のペースで集う。一緒に昼食をつくって食べ、お茶飲みやおしゃべりを楽しむ。

坪井さんは小屋を、誰でも気軽に立ち寄れる憩いの場として地域に開放した。厨房設備や食器類、椅子・机・テーブルなどのほか薪ストーブや火鉢も備え、冬でも暖かく快適に過ごせる。

2017年4月、「いきいき百歳体操」などの介護予防体操を取り入れた。以降、毎週木曜を体操の日としている。同12月には、会の名称を「朝日3丁目元気の巣」に決定。カラスの足跡にちなみ、元気を育む巣にしようとの思いを込めた。

10年ほど前から、気の合う女性たちがここで親睦会を催すようになった。「はじめは月

集まるときは、皆で食材を持ち寄るほか、町内のスーパーへ買い出しに行く。車の運転ができる人ができない人を乗せ、自宅用の買い物も一緒に済ませる。仲間のなかには、ひとり暮らしの人や、家族と同居でも日中は一人きりになる人もいる。普段から家の灯りの点いた・消えた、カーテンの開いた・閉じたなどをお互いにさりげなく見守る。仲間の一人、武蔵幸

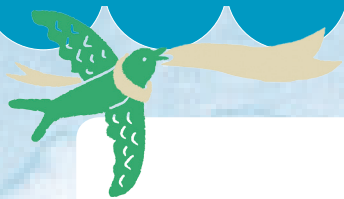


北海道 弟子屈町



子さんは、「何かあればいつでも家を訪ね、困りごとがあれば助け合います」と語る。「元気の巣」に支え合いの新たな足跡を二歩一歩、刻んでいる。木

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

老いたワーカーからの遺言(その2)

いまの若いワーカーに、私のような時代遅れの親爺にはない、違った意味での誠実さと真面目さを感じることが多いです。しかし、それがために、名前と顔が一致しない、簡単にいうとどこの誰かが判らないことも多々あり。要は、私のもの覚えの悪さに起因しているのですが、良い意味でも、また悪い意味でも、インパクトのあるワーカーであれば、大丈夫。

ワーカーのありようで、ものごとを客観的に捉え、いつも沈着冷静に、根拠をもって当事者主体に誠実に支援していくイメージにとらわれている若者に伝えたい。こんなワーカー、宮城にいとすれば、一人か二人？嘘です。いません。これに近い尊敬すべきワーカーはいても、ロボットみたいな感情のないワーカーではありません。この件は、以前にも書いた記憶がありますが、取えもう一度。

おもしろいワーカー、面倒くさい奴、浪花節、見た目イケメンなど、相談者から興味を抱かれるワーカーに。お役人のように事務的だったり、お医者さまのように偉そうだったりするワーカーでは、相談する気が萎えてしまいます。

ワーカーの相談対応では、本音を言える関係性に拘るのですね。宮城福祉オンブズネット「エール」の元相談員であったWさん、この方の面接対応をライブで共有できたのは私の「宝」。生涯現役で、雨にも負けずに奔走する姿、本人の意思を代弁してどの機関や組織の者に対しても変わらない「矜持」をもって遣り合う姿を、私たちに示してくれるでしょう。Wさんのリベラルな姿勢での支援、共有する機会を持たれるとよい。音楽や映画、絵画などに造詣が深く、そのことが根底にあつてのワーカーマインド。とはいえ、ワーカー出身ではありません。

最近、「住民によるソーシャルワーク」という言葉を耳にして、ソーシャルワークを狭く捉えていたように反省しています。最近本当に反省ばかりの日々ですが、地域福祉においては、住民によるソーシャルワークの展開がたいせつ。Wさんには、市井の人に対して慮る想像力と感性を感じます。だから、Wさんらしい個性的なワーカーに至ったのだと、老兵は想うのです。

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上章



いろいろなことを体験すること。
そこから何かを感じることに。
“人生って、体験し感じること”ではないか？

毎月のように兵庫から宮城に行き、宮城県サポートセンター支援事務所の仕事に携わる。一週間滞在するが、前日の日曜日の昼すぎには仙台に入る。いつも泊まるホテル近くのクリスロード商店街にある「仙台セントラルホール（旧・桜井薬局セントラルホール）」で、いろいろな映画を観る。デジタルの映画だけではなく、35ミリフィルムを上映している映画館。邦画も外国ものもいろいろ上質の映画を上映している。私は、社会派、歴史、人物、ドキュメンタリーなどを扱ったものをよく観る。ポスターを見て、「あっ、これを観よう」。ポスターが、私に観るように誘ってくる。

自分はなぜ、そういう映画を観たくなるのか？自問したことがある。その答えは・・・いろいろな時代、地域、国、社会、人生、生き方を少しでも、せめて映像からでも知りたい、体験したい、との思いが強いように思う。この時代に、日本国で、団塊世代の浜上章という人間の限られた時間、社会での体験は、ほんの僅かでしかない。もっといろいろな時代、地域、人生を体験してみたい。そんな内なる思いの衝動が、自分のなかに秘められているのかもしれない。

人はなんのために生きているのか？その人なりのその時代に、その生きる地域や社会の制約のなかで生きて、いろいろな体験をする。そのことで知識や概念ではなく身体で体験する。自分で体験して感じたこと、気づき学んだことは“自分のもの”になる。つらいことも、悲しいことも、苦しいことも、うれしいことも、感動することも、怒りも、嫉妬や憎悪も恨みも、不安もやさしさも、愛おしさも体験してみても自分のこととして感じてわかるもの。

ある本に、「完璧な愛とは、全ての感情の総和である」とあった。自分で体験してはいないことは本当には共感できない。人生は、いろいろな体験をすることでいろいろな感情を自分のものとして理解することができる。他者の悲しみもつらさも、同じような体験をして本当の気持ちがわかる。共感できる。だから、あなたがこれまで体験した、人には言えない悲しみも、つらさも、私がいま体験し感じていることにも大きな意味があると思う。



名取市すまいとくらしの再建支援センターの皆さん
(左から、小野寺広和さん、高木秀明さん、斉藤慶さん)

暮らしを支える支援員30

住宅確保のその先もサポート

名取市すまいとくらしの再建支援センター
(宮城県名取市)



宮城県名取市は、東日本大震災で被害を受けた人たちの生活再建をサポートする「名取市すまいとくらしの再建支援センター」を2017年4月から生活再建支援課内に転居等の相談窓口として開設している。同センターを運営するのは、仙台市に本拠地を置く「一般社団法人パーソナルサポートセンター(以下PSC)」で、職員3人が支援員として常駐している。仮設住宅入居者の恒久的な住宅への転居や、転居後の生活の不安解消に向けた支援を行う。

同市内では、応急仮設住宅団地5か所に138戸215人が、借りあげ賃貸住宅に96戸215人が入居し(18年4月26日時点)、それぞれに「なとり復興支援センターひより(運営:市社会福祉協議会)」と「名取市サポートセンターどっと.なとり(市直営)」が見守りなどを行っている。情報共有も行い、すまいとくらしの再建支援センターの支援員が、仮設住宅の気になる入居者のもとへ足を運び、状況確認や相談にあたっている。19年度は、147世帯を支援した。

災害公営住宅などの引越し先を確保できていない人々には、資金が不足していたり、保証人がいなかったり、緊急連絡先がなかったり、税金の滞納があるなど、賃貸物件の契約を結ぶ際に壁となるさまざまな課題が

ある。「現象・状況だけを見てのその場の支援を行うのではなく、背景を確かめて課題解決するのが本来の再建支援」と語るのは、センター長の高木秀明さん。たとえば、仮設住宅入居者で、思うように就職できなかったり、近所や親戚づきあいが上手くいかずに孤立してしまった人の背景の1つにコミュニケーション能力不足があれば、それを補うため、支援員が同行して不動産屋に賃貸契約の相談をする。そうすると、状況を理解し、契約条件を緩和して入居を認めてくれることもあるという。

PSCは、もともと生活困窮者の自立支援等を目的とした団体で、震災発生に伴い、宮城県やほかの市でも転居支援の窓口を受託・運営してきた実績をもつ。そういった自立支援のノウハウを生かし、市内を中心とした他機関と連携する。「『住まい確保=生活再建』ではない」と高木さん。転居先での健康上の不安や孤立などにも相談にのる。他市町村で被災して、現在同市内に移り住んで生活している人も支援の対象となるなど、市民の生活に親身に寄り添った支援となっている。清

DATA 名取市すまいとくらしの再建支援センター
〒981-1224 宮城県名取市増田字柳田570-2
仙台法務局名取出張所2階 TEL 022-290-2090

☆次号予告 特集「夜の支え合い」

購読者を募集しています!

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?

購読会員 年3,696円(年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座
口座番号:02260-9-46303
加入者名:全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み
を記入してください。



読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

少子化や核家族化によって地域のつながりが薄れ、支援を必要とする人が急増するなか、民生・児童委員の人たちの負担は増していると思いますが、地域住民の役に立ちたいという使命感を持って生きいきと活動されている方がたの記事を読んでとても励まされました。(沖縄県 A・W)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail joho@clc-japan.com

編集後記

今回12頁に掲載した「仙台紙飛行機を飛ばす会」は、本紙68号掲載の「泉中央地区社協主催」の「地域づくり勉強会」で、地区社協の担当者から素敵な住民活動として紹介があった団体です。9頁の大町きらさらサロンには、「IS-1グランプリ第5回いがす大賞」(67号掲載)で出会って取材にお伺いすることになりました。ふとした縁から、取材の種が芽生えています。一つひとつの出会いを、これからも大事にしていきたいです。(田中)